

大阪学院大学
外国語論集
第69号

“Miriam” 研究 — 「影」としてのMiriamの役割
..... 山 口 修 1

研究ノート

総合科目（ワールド・ツアーに出かけよう！）における「ドイツ語」
の実践報告 — 2008～2014年度の7年間を経て、8年目の2015年度へ
..... 神 谷 善 弘 19

海岸ツィムシアン語の等位接続詞adaについて
..... 笹 間 史 子 35

平成 27 年 6 月

大阪学院大学外国語学会

大阪学院大学
外国語論集
第69号

平成 27 年 6 月

大阪学院大学外国語学会

“Miriam” 研究 — 「影」としての Miriam の役割

山 口 修

序

Truman Capote の短篇 “Miriam” (1945) の Mrs. Miller について、Helen S. Garson は、“[Critics] share the views that Mrs. Miller is a woman who finds her life intolerable, and who therefore creates another self, a person she simultaneously longs to be and rejects. She is destroyed by the revelation and can escape it only through madness” (Garson 1992, 13) と指摘する。¹ 確かに、Mrs. Miller が Miriam を創り出したのは間違いない。だが、Mrs. Miller は、本当に自分が創造した Miriam によって狂気に導かれ、壊されてしまうのだろうか。Miriam は否定的な存在なのだろうか。本論では、Jung 心理学における「影」の概念を援用しながら、Miriam の役割について考察し、なぜ物語の最後で Miriam が再登場するのか考えてみたい。再登場の理由を明らかにすることで、Miriam と Mrs. Miller の関係について新たな見方ができるのではないかと考える。

1

少女 Miriam について、Ihab Hassan は “a guilty image of her [Mrs. Miller’s] other self” (236) と述べ、Michael J. Larsen は “the double or *Doppelgänger*” (142) と述べるように、二人が分身の関係にあることはこれまでも指摘されてきた。それは次のような点を根拠としている。

まず第一に、例えば、Edgar Allan Poe の *William Wilson* (1839) をはじめ多

くの「分身小説」に見られるように、二人の名前が一致している点だ。Mrs. Miller と Miriam は映画館の前で出会う。名前を尋ねられた Miriam は “‘Miriam,’ she said, as though, in some curious way, it were information already familiar” (164) と答え、Mrs. Miller は “Why, isn’t that funny — my name’s Miriam, too” (164) と答える。この “information already familiar” という言葉が示すように、Mrs. Miller が名乗る前に二人が同名であることが Miriam によって示唆される。

次に、Daniel Keyes の *The Minds of Billy Milligan* (1981) の Billy のような多重人格者の症例が示すように、ある人格が別の人格の（あるいは互いの）思考を熟知していることだ。Mrs. Miller と Miriam にも同様な例が見られる。以下、その場面を見てみよう。

“How did you know where I lived?”

Miriam frowned. “That’s no question at all. What’s your name? What’s mine?” (166)

At precisely five the doorbell rang. Mrs. Miller *knew* who it was. The hem of her housecoat trailed as she crossed the floor. “Is that you?” she called.

“Naturally,” said Miriam, the word resounding shrilly from the hall. “Open this door.” (171, 強調 Capote)

“Wasn’t it nice of you to buy me the cherries . . .?” [. . .] “. . . and the roses and almond cakes? How really wonderfully generous. You know, these cherries are delicious. [. . .]” (171)

Mrs. Miller は無意識のうちに Miriam の好きなものを買ひ、逆に Miriam も

Mrs. Miller の名前や住んでいる場所などをあらかじめ知っている。“*knew*”、“*Naturally*” という語によって、互いが互いを「知っている」状態が示唆される。また、夜中の訪問時に Tommy という名のカナリヤが Miriam の存在にもかかわらず歌い出す点も、Tommy が Miriam を恐れておらず、二人の共通点を感じ取っていることを推察させる。

さらに、第三者には分身の姿が見えないというのも分身譚の特徴の一つである。物語終盤で、Mrs. Miller が助けを求めた男性が Mrs. Miller の部屋を確かめに行くが、“*Nobody there*” (173) という答えしか返ってこない。物語全体を通して、Miriam の姿は Mrs. Miller によってしか確認されていないのだ。

以上のように、名前が一致している、互いの存在を認識している、Mrs. Miller にしか見えていないという三点から、Miriam は Mrs. Miller の分身であると考えてよいだろう。

2

このように、“Miriam” を分身をテーマにした小説であると考えると、C. G. Jung の「影」の概念が、少女 Miriam を理解する手がかりとなる。河合隼雄は Jung が元型の一つとして挙げる「影」について次のように説明する。

影の内容は、簡単にいって、その個人の意識によって生きられなかった反面、その個人が認容しがたいとしている心的内容であり、それは文字どおり、そのひとの暗い影の部分をなしている。(101)

Jung によれば、自分の生きられなかった反面が「影」として無意識下に抑圧され、それゆえ「本体」と「影」はしばしばその性格、行動において対照をなす。²

ここで簡単に二人の対照性をみておこう。Mrs. Miller は、関心の対象も狭く、友人もおらず、外出することもほとんど無い。平凡な服装で短髪、隣人か

らも気づかれない地味な女性だ。彼女の生活ぶりは“Her activities were seldom spontaneous” (163)とあり、物質主義華やかな時代、New York という大都会においては、いわば禁欲的ともいえるものだ。一方 Miriam は、銀白色の長髪で、紫色のベルベットのコートを着て独特の気品をもった姿で現れる。物怖じすることなく Mrs. Miller にあれこれと要求する自己主張の強い女性である。また、“Give it to me” (168) とカメオを欲しがるように、物質主義的欲望の持ち主でもある。確かに、先に Hassan が指摘していたように Mrs. Miller にとって“guilty”と感じさせるイメージがともなう。しかし、美しいもの、美味しいものといった欲望の対象に対して“beautiful” (168)、“very nice” (168)、“lovely” (168) と自らの感情を素直に表現できる存在でもある。Mrs. Miller が欲望を抑えた禁欲的生を選択しているのに対し、Miriam は自分の欲望のままに生きる生を選んでいる。これらのことから、Miriam は Mrs. Miller とは対照的存在であることがわかる。Garson は Miriam について、“everything that she [Mrs. Miller] is not” (Garson 1980, 43) と述べているが、まさしく Miriam は「影」の定義を具現化する存在であるといえる。³

では、「影」である Miriam は Mrs. Miller に対しどのような役割をもっているのだろうか。ここで、「影」を自己を導くものと考える Duane Schultz の論をみておきたい。⁴「成長心理学」の立場から人間性の健康な面に注目する Schultz は、Jung 心理学における健康な人格とは「われわれの人格にある無意識的な力との触れあいを回復させること」であり、「ユングの強調する人間らしさへの方法は、まさにユング自身のための方法、すなわち無意識との直面」(146) であるとして、次のように続ける。

ユングは、無意識による人格の支配あるいは統制を主張していたわけではない。それとはまったく逆である。彼が理想とした精神的健康とは、意識が無意識の力を方向づけ、導くという状態であった。意識の世界と無意識の世界は統合されなければならない。そして、どちらの面も自由に展開

していくことが許されねばならない、というものである。(146)

健康な人格の目標は、ペルソナを収縮させ、人格の他の側面を発達させることである。もちろん、およそ役割を演じるということは、すべて偽りなのである。健康な人間と健康でない人間の違いは、後者が他人だけでなく、自分自身をも欺いているという点である。健康な人間は、いつ自分が役割を演じているのかを知っており、同時に、自分自身の内面性を知っている。(156)

健康な人格においては、我々は相手に応じてペルソナを付け替え、他者の前で自己を演じている。しかし何らかのきっかけで、本来多様なはずのペルソナがある一つのペルソナに固定化し多様な自己を演じられなくなるとき、精神的な危機が生じる。Jung によれば、そのような状況下で意識を方向づけるもの、それが無意識の、すなわち「影」の力である。孤独な生活を続ける Mrs. Miller にはペルソナが入れ替わる機会がなく、自分が演じる役割についての自覚もない。知らず知らずのうちに彼女のペルソナは Miriam Miller ではなく、Mrs. H. T. Miller として固定化している。それは不健康な状態だと考えてよい。⁵

以下、「影」としての Miriam の役割について具体的に考えてみよう。そもそも分身の登場は Mrs. Miller の孤独な生活に起因する。外界と断絶することで、彼女を支えてくれるはずの他者の視線が不在になり、彼女のアイデンティティは不安定になっている。自己意識の希薄さこそ、分身を生み出す一番の要因となる。例えば、彼女は Mrs. H. T. Miller と名のっているが、それは H. T. Miller 夫人としての自己に執着するあまり、自分が Miriam Miller であるとの意識がないことを意味する。⁶ Garson が指摘するように “a person without an identity of her own” (Garson 1992, 9) といっている。しかし、Miriam の登場で、彼女は自己を意識するようになる。彼女が唯一、自分の名を意識するの

が、Miriam と出会ったときだ。初めて Miriam に出会った Mrs. Miller は奇妙に興奮した状態になるが、外界と断絶している彼女にこのような感情を与える存在が Miriam なのだ。Miriam には、Mrs. Miller 自身に自分の存在を問うような感情を起こさせ、自己の存在を確認させる役割があるといえる。

Miriam の第二の役割は、後に考察するが、Mrs. Miller の無意識の願望を表現することである。分身は本体の「影」を象徴するものとして描かれる場合が多い。⁷ 先に挙げたように、この小説では禁欲的な Mrs. Miller と自由奔放な Miriam が対照的に描かれている。Miriam の奔放さは、Mrs. Miller がなし得なかった活動的な生き方を表している。また、「影」には本体を導く役割があることを考えると、以下の場面は Miriam が何らの形で Mrs. Miller を導いているとも考えられる。それは、夢の中の少女という形で象徴的に現れている。

[A] small girl, wearing a bridal gown and a wreath of leaves, led a gray procession down a mountain path, and among them there was unusual silence till a woman at the rear asked, "Where is she taking us?" "No one knows," said an old man marching in front. "But isn't she pretty?" volunteered a third voice. "Isn't she like a frost flower . . . so shining and white?" (169)

この白い少女は間違いなく Miriam であり、現実の中で方向性を失った Mrs. Miller を別の世界へ導くものとして描かれている。これは *Other Voices, Other Rooms* で、白い服で女装していた Randolph が Joel を手招きしていたイメージと重なる。ここで葬列のイメージが伴うのは、分身の創造が一方で自己の死も暗に含んでいるからだ。現在の自己の否定が分身を生み出すのである。⁸

実際、現実の世界でも Miriam は Mrs. Miller に働きかける。彼女との出会いの翌日から Mrs. Miller の行動が変化する。Larsen が "In the days following Miriam's first visit, Mrs. Miller feels exhilarated [. . .] and, in general, strays

from the paths of thought and action that she has followed for years” (143) と述べるように、Miriam との出会いが彼女を過去の生活から別の方向、別の世界へ導いていく。

第三に、上と矛盾するようであるが、Miriam は、Mrs. Miller が死の恐怖を回避させるために創り出した、いわば希望だということだ。Miriam が分身であるなら、本来他の分身譚に見られるように、主人公と同じ似姿の分身であるはずだ。しかし、Mrs. Miller の分身は子どもの姿であった。それはなぜか。その理由として考えられるのは、未来を閉ざされた Mrs. Miller が、未来が開かれている子ども Miriam を創出することによって、精神的に死を先延ばしし、その恐怖を避けようとしたからである。もし Mrs. Miller が現状に満足しているのであれば、Miriam が登場する必然性はなく、そのまま平穏な日常を送ればいい。もし仮に彼女と同じ似姿であれば、それは死の予兆にしかならないだろう。分身 Miriam の登場は彼女の生存を脅かすかのように思われるが、一方で、彼女が無意識下ではけっして現状に満足していないことを逆説的に証明することになるのである。とすれば、Miriam を Mrs. Miller の生まれ変わりだと捉えることも可能だろう。

以上見てきたように、Miriam は、確かに Mrs. Miller に恐怖をもたらす存在ではあるものの、Mrs. Miller に自分の現状を認識させ、自分のもつ願望を明らかにさせ、死の恐怖を回避させるという必ずしも否定的な存在とは言い切れない面があることがわかる。

4

Miriam は、Mrs. Miller の自己の内部に存在する Miriam 的なものの否定によって生み出された。だが、Miriam の存在を怖れつつも、Mrs. Miller は彼女の登場を予期し、期待しているようでもある。では、Miriam の登場で Mrs. Miller はどのように変わっていくのか、みていこう。

Miriam が登場したとき、Mrs. Miller は自分が何者であるか、また自分が何

を望んでいるのかもわからない。Miriam が初めてアパートを訪ねてきた場面での “‘What do you want?’ [...] ‘What do you want?’ she repeated” (166) という Mrs. Miller の Miriam への、すなわち無意識への問いかけは、自分が何を欲しているのかわからないことを示している。また、以下の場面に見られるように、Mrs. Miller には自分が孤独であるという自覚さえない。

As she stood, striving to shape a sentence which would somehow save the brooch, it came to Mrs. Miller there was no one to whom she might turn; she was alone; a fact that had not been among her thoughts for a long time. Its sheer emphasis was stunning. But here in her own room in the hushed show-city were evidences she could not ignore or, she knew with startling clarity, resist. (168)

孤独こそが Miriam が登場する理由だが、当初から、彼女は Miriam を受け入れることに消極的である。“You know, I don’t think you’re glad I came” (166) という Miriam の発言の通り、Mrs. Miller は、Miriam を招かれざる客として応対している。

精神分析的には、「影」は「本体」にとって望ましいものではないため、「影」との対決は「本体」にとって大きな苦痛を伴う。Miriam が現れることで、Mrs. Miller が頭痛を起こしたり、夢にうなされたりするのは当然だ。しかし、Mrs. Miller は Miriam を完全に否定しているわけではない。なぜなら、彼女は Miriam が再び現れることを予期し、彼女を迎える準備をするために買い物へ出かけているからだ。だが、この時点でも “She had no idea what she wanted or needed, but she idled along, intent only upon the passers-by, brisk and preoccupied, who gave her a disturbing sense of separateness” (169) と、自分が欲するものを見つけたわけでも、孤独が解消されたわけでもない。それゆえ以下のように、彼女はなぜそのような行動をするのかという自覚がないまま、

無意識に支配され行動するのである。

“Six white ones, did you say?” asked the florist. “Yes,” she told him, “white roses.” From there she went to a glassware store and selected a vase, presumably a replacement for the one Miriam had broken, though the price was intolerable and the vase itself (she thought) grotesquely vulgar. But a series of unaccountable purchases had begun, as if by prearranged plan: a plan of which she had not the least knowledge or control. (170)

しかし、この行動は Miriam が彼女に取らせた行動である。例えば、バラや花瓶を買うのは、“She [Miriam] touched a paper rose in a vase on the coffee table. ‘Imitation,’ she commented wanly. ‘How sad. Aren’t imitations sad?’” (166) という Miriam が初めて部屋を訪れた場面と呼応する。この Miriam の指摘を受け、彼女は造花ではなく本物のバラを買う。一方、高価で趣味の悪い花瓶は、つましい生活をする Mrs. Miller が普段けっして買うようなものではない。サクランボやアーモンドケーキも同様である。彼女の価値観とは違う価値観で行動させられているのである。“Imitation” という語は Mrs. Miller の生き方そのものが “Imitation” であることを示す。Miriam が花瓶を床にたたきつけるのも、本物の美を感じる力を失い造花で満足するほど感情を鈍化させ、自分の欲望とは反対の生活をする Mrs. Miller へのいらだちを示している。このようにみえてくると、Mrs. Miller の行動は、Miriam の願望、すなわち自らの無意識の願望を叶えるためのものであることがわかる。

無意識のうちに Miriam の願望に従う Mrs. Miller だが、再び Miriam が現れたときには、“It was not spell-like compulsion that Mrs. Miller felt, but rather a curious passivity; she brought in the box, Miriam the doll” (171) と、受動的ではあるが “curious” な状態で、すなわち “wanting to know about something” (*Longman Dictionary of Contemporary English*) という気持ちで、Miriam の

ことを知りたいと考え始めている。

Miriam との三度目の遭遇の場面で、一緒にアパートに住むのだとせまる Miriam に Mrs. Miller は、泣き始める。

Mrs. Miller's face dissolved into a mask of ugly red lines; she began to cry, and it was an unnatural, tearless sort of weeping, as though, not having wept for a long time, she had forgotten how. (172)

長い間、泣くことさえ忘れていた彼女は、悲しいという感情をようやく表に出せたのではないか。そして、これまで話しかけたこともない階下の住人に助けを求めるという自発的行動を起こす。こうして、欲望に対し素直な感情を表出する Miriam の存在が、Mrs. Miller に、自らが抑圧していた感情、抑圧していた行動を意識化させる。この一連の動きの中で、彼女は「影」と交流し始め、ここに「影」と「本体」の回路が開かれたことになる。

そして Mrs. Miller は以下の場面で、ついに自己が何者であるかに気がつく。

Suddenly, closing her eyes, she felt an upward surge, like a diver emerging from some deeper, greener depth. In times of terror or immense distress, there are moments when the mind waits, as though for a revelation, while a skein of calm is woven over thought; it is like a sleep, or a supernatural trance; and during this lull one is aware of a force of quiet reasoning: well, what if she had never really known a girl named Miriam? that she had been foolishly frightened on the street? In the end, like everything else, it was of no importance. For the only thing she had lost to Miriam was her identity, but now she knew she had found again the person who lived in this room, who cooked her own meals, who owned a canary, who was someone she could trust and believe in: Mrs. H. T. Miller. (173-

74)

ここに示されるように、Mrs. Miller は “revelation” を待っている。しかし、その間に理性が彼女に自分が何者であることを認識させる。一度失われたアイデンティティを取り戻したと確信した Mrs. Miller が見出したもの、それは残念ながら、Miriam Miller ではなく、Mrs. H. T. Miller だった。Miriam との遭遇で、Mrs. Miller はそれまで考えることさえなかった自らの存在に意識を向けられるようになった。つまり、自身が孤独であること、自らのアイデンティティを失ってしまっていたことに気づくところまでは、Miriam によって導かれていった。しかし、まだ彼女は H. T. Miller 夫人、すなわち Mr. H. T. Miller の属性を強く帯びたままの存在であり、Miriam という自分のアイデンティティを取り戻せていない。

最後の場面で、“Listening in contentment, she became aware of a double sound: a bureau drawer opening and closing” (174) とタンスの引き出しを開け閉めする音が聞こえてくる。この引き出しの開け閉めは、彼女の内部にまだ明らかになっていないものが存在することを示している。Miriam は音を立てることで、Mrs. Miller にその存在を示しているのではないか。Mrs. H. T. Miller としての自分を取り戻したことに満足しつつも、その音を聞いている。もし、Mrs. Miller が破壊されるのだとしたら、そもそも彼女が Mrs. H. T. Miller だと認識する必要はない。自分が何者かわからなくなったとき、人は狂気へと誘われるからだ。だが、Mrs. Miller は自分が何者であるか自覚する。これまで失っていた「認識する主体」としての自分を自覚したのだ。引き出しの音は、「認識する主体」を取り戻した Mrs. Miller に、内在する Miriam を認識するよう促す音なのだ。そして、再び、Miriam が登場するのである。

結 論

以上見てきたように、「影」としての Miriam は、Mrs. Miller に自覚を促す役割を担っていた。ペルソナが固着していた Mrs. Miller は、Miriam との遭遇によって、徐々に自分が何者であるかに気づき始めた。Miriam が求めているものは、Mrs. H. T. Miller としてではなく、Miriam Miller としてのアイデンティティである。それは、彼女に内在する欲望の存在に気づかせることであった。先に Schultz が指摘していたように、「自分自身をも欺いている」状態ではなく、「自分自身の内面を知っている」(156) ことが望ましいのだと考えれば、Mrs. H. T. Miller としての自己認識を捨てきれないとき、再び Miriam が登場するのは、彼女を破壊するためではない。今一度、Mrs. Miller に Miriam というアイデンティティを、自己の内面を自覚するよう促すためなのである。このように考えると、「影」としての Miriam の存在を肯定的に捉えることも可能ではないかと考える。

注

- 1 Robert L. Gale は *Truman Capote Encyclopedia* (Jefferson: McFarland & Company, Inc., Publishers, 2010) の中で “a little girl, also named Miriam [...] enters her [Mrs. Miller’s] life and, doppelgänger that she is, destroys the woman’s separate identity” (160) と述べ、やはり Mrs. Miller の破壊を示唆している。
- 2 河合は「そのひとの暗い影の部分」としているが、本文に示した Duane Schultz の考え方からすれば必ずしも「影」を否定的に捉える必要はないだろう。
- 3 今井夏彦も Miriam を「影」としているが、「やむにやまれずミリアムという幻想をつくりだしてしまったミラー夫人であるが、ついにはその幻想が現実をおおいつくしてしまい、区別がつかなくなる。そこには『再生』の道は見出しにくい」(285) として、Mrs. Miller の再生の可能性を否定

している。（「Miriam 試論 — 死の天使」『英米文学研究』14号 梅光女学院大学英米文学会 1978参照。）

- 4 井土康仁は Sigmund Freud の「快感原則」を用いた議論で、次のように述べ、Miriam を導き手としている。

Freud によれば、心には「快感原則」に則る部分と、「快感原則の彼岸」へ向わせる欲動が潜んでいる。その欲動は、彼女を再び「彼岸」へと連れ出すことになるだろう。その導き手となるのは、勿論 Miriam 以外に有り得ない。だからこそ、Miriam は再び、Mrs. Miller の前に “Hello” と言いながら現れるのだ。（36, 「カポーティ、移動する — フィクションとノンフィクションの間で」『Language & Literature (Japan)』19 愛知淑徳大学大学院英文学研究室 2010）

- 5 「影」との関係が否定的になった場合どうなるのか。Hans Christian Andersen の『影法師』（1847）を題材に分析した梅内幸信は、「他人が心の中で秘かに思っていることを自由自在に読み取れるという影法師は、明らかにユングの言うところのシャドウに当たっている。このシャドウが一つの人格をもって自律するということは、まさに学者が自己の無意識を無視して、影の存在を徹底的に抑圧していたということを示している」（339-40）と述べているが、このように自律した影は、やがて本体を破滅させることになる。（梅内幸信『悪魔の霊液 — 文学に見られる自己の分裂と統合』同学社 1997年参照。）
- 6 大野一之は、“Miriam” というタイトルについて、Capote は「〈ミリアム・ミラー〉という一人の人物のアイデンティティの異質な部分を〈ミラー〉と〈ミリアム〉にそれぞれ表徴させ、〈ミリアム〉の話を〈ミラー〉の観点から語ろうとした」（79）と述べ、Miriam と Miller という名の対比を指摘している。（「ミセス・ミラーの覚めることのない悪夢：分身小説と

しての『ミリアム』『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』vol.8 愛媛大学法文学部 2000参照。)

- 7 文学における「分身」、「影」については、オットー・ランク『分身 ドッペルゲンガー』(有内嘉宏訳 人文書院 1988年)、同『おとぎ話における影』(氏原寛訳 人文書院 1981年)、河合隼雄『影の現象学』(講談社学術文庫 1987年)、*Fearful Symmetry: Doubles and Doubling in Literature and Film* (Ed. Eugene J. Crook, Tallahassee: UP of Florida, 1981) に詳しい。
- 8 Garson はこの場面を、“‘procession’ away from, not toward, a mountain top; traditionally mountain tops represent wisdom, achievement, and understanding, but these people clearly are not being led in that positive direction” (Garson 1992, 11) と解釈しているが、Miriam が無意識の欲望を示す存在であるとするれば、Garson のいういわばロゴス(理性)的価値観ではなく、“down” という語が示すように無意識下のパトス(感情)的価値観の方向へ、つまり無意識の欲望を気づかせる方向へと Mrs. Miller を導いていると考えられないだろうか。

また、Mrs. Miller はこの場面に出てくる老人と翌日通りで出会うが、後に Miriam との同居が示唆されるが、Mrs. Miller の性的抑圧を表しているといえるかもしれない。

引用文献

- Capote, Truman. “Miriam.” *The Grass Harp and A Tree of Night and Other Stories*. New York: Signet Book, 1980.
- Garson, Helen S. *Truman Capote*. New York: Fredrick Ungar Publishing Co., 1980.
- , *Truman Capote—A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne Publishers, 1992.
- Hassan, Ihab. *Radical Innocence* Princeton: Princeton UP, 1961.

- Larsen, Michael J. “Capote’s ‘Miriam’ and the Literature of the Double.”
Truman Capote—A Study of the Short Fiction. New York: Twayne
Publishers, 1992.
- Longman Dictionary of Contemporary English Fifth Ed.* DVD-ROM Ed.
Pearson, 2009.
- Shultz, Duane. *Growth Psychology—Models of the Healthy Personality*.
New York: Van Nostrand Reinhold Company, 1977. (『健康な人格 — 人間
の可能性と七つのモデル』上田吉一監訳 川島書店 1982年)
- 河合隼雄『ユング心理学入門』培風館 1967年

A Study of “Miriam” — Miriam’s Role As a “Shadow”

Osamu Yamaguchi

Miriam in Truman Capote’s “Miriam” is a girl who is a Doppelgänger of Mrs. H. T. Miller. Most critics point out that Mrs. Miller creates her double, Miriam, and eventually, Miriam destroys Mrs. Miller’s identity. It is certain that Miriam is Mrs. Miller’s alter ego, but is it true that Miriam affects Mrs. Miller negatively? This paper aims to examine Miriam’s positive effect on Mrs. Miller and why she reappears, saying hello, at the last scene of the story.

In Jungian psychology, “shadow” is an unconscious aspect of the personality which the conscious ego does not want to be. In other words, “shadow” is an undesirable aspect of the conscious self. As Duane Schultz says, Jung argues that the unconscious aspects and the conscious self should keep balance within the healthy personality. In this sense, “shadow” plays an important role in guiding the conscious ego toward a desirable personality.

Mrs. Miller, an isolated old woman, lives a secluded and passive life. She identifies herself as Mrs. H. T. Miller. Miriam, who is the “shadow” of Mrs. Miller, appears to make Mrs. Miller live actively and realize that she is not Mrs. H. T. Miller but Miriam Miller. The encounters of Miriam and Mrs. Miller gradually make Mrs. Miller act positively, begin to understand who she is, and find herself an isolated, lonely woman who doesn’t have anyone she relies on, who still thinks that she is Mrs. H. T. Miller, not Miriam Miller. As a result of that, Miriam, the “shadow,” as the guide of the conscious self, reappears to make

her realize that she is Miriam. In this sense, Miriam seems to play a positive role in the story.

総合科目（ワールド・ツアーに出かけよう!）における「ドイツ語」の実践報告 —2008～2014年度の7年間を経て、8年目の2015年度へ

神 谷 善 弘

本原稿は、2015年2月27日に開催された大阪学院大学外国語学会での口頭発表『総合科目（ワールド・ツアーに出かけよう!）における「ドイツ語」の実践報告—2008年度～2014年度の7年間を振り返って』をもとに書き上げたものである。

1. はじめに

大阪学院大学の全学共通科目「総合科目（ワールド・ツアーに出かけよう!）」（以下「ワールド・ツアー」）は、2015年度現在、フランス語、ドイツ語、英語、中国語、韓国語の教員5名が、それぞれの言語と社会や文化について、3回ずつのリレー形式で講義を行っている。

大阪学院大学は、2015年度現在、商学部、経営学部、経済学部、法学部、外国語学部、国際学部、情報学部の7学部から成っているが、「ワールド・ツアー」は、全ての学部の1～2年次の学生が履修することのできる、半期15コマ2単位の全学共通科目である。

2. 「ワールド・ツアー」の概要

2.1. 到達目標

シラバスに掲げている「ワールド・ツアー」の到達目標は、次の2点である。

- (1) それぞれの言語の特徴や社会的・文化的背景などを学び、国際社会を生き抜くための最低限必要な知識、幅広い視野を身に着けることを目標とす

る。

- (2) 各言語で簡単な挨拶ができるようになると同時に、英語以外の言語の知られざる「魅力」も学び、次学期以降における各言語の履修につなげる。

2.2. 評価基準

評価基準は、2010年度以降は「定期試験50%（各言語10%ずつ）、日常点50%」としている。（2008～2009年度については後述する。）

2.3. 教科書、参考書、参考サイト

教科書は、初年度の2008年度以来使用せず、各教員がプリントを配布している。

参考書については、2008年度は示さなかったが、2009年度より、西村淳子（監修）『多言語多文化学習のすすめ ― 世界と対話するために ―』（朝日出版社、2008年）を掲げており、講義中に付属のCDを流す等の方法により、学生に推薦している。

同書は、多言語多文化社会を垣間見るための入門書である。フランス語、ドイツ語、英語、スペイン語、イタリア語、中国語、韓国・朝鮮語、日本語の8つの言語の特徴紹介と、それぞれの文化的背景や文化間交流についての解説がある。大まかではあるが、8言語8文化を比較することができ、すぐに使える「便利な一言100の表現」などもそれぞれの8言語（仏、独、英、西、伊、中、韓、日）で付属CDに収録されている。

参考サイトとしては、それぞれの国の大使館ホームページや「地球の歩き方」サイト（<http://www.arukikata.co.jp/>）を示すようにしている。

2.4. 「ワールド・ツアー」で扱う言語

「ワールド・ツアー」で扱う言語は、初年度（2008年度）の3言語から始まり、2012年度以降は5言語となっている。詳細を以下に示す。

2008～2009年度	フランス語、ドイツ語、英語
2010～2011年度	フランス語、ドイツ語、英語、中国語
2012年度以降	フランス語、ドイツ語、英語、中国語、韓国語

3. 講義の内容

3.1. 講義スケジュール

2015年度前期の「ワールド・ツアー」の講義スケジュールを示す。

第1回	Introduction 中国編(1) 中国語と中国観光
第2回	中国編(2) 北京・上海周辺の見どころを調べる
第3回	中国編(3) アバターと張家界・黄山、さまざまな中国語
第4回	フランス編(1) 国際語としてのフランス語
第5回	フランス編(2) フランス語の歴史・フランス語と英語、スペイン語などとの関係
第6回	フランス編(3) フランス語のあいさつ、特徴
第7回	ドイツ編(1) 挨拶表現／ドイツ語を話す国々
第8回	ドイツ編(2) ホテルのチェックイン／ドイツにおける日本文化
第9回	ドイツ編(3) レストランでの注文／ドイツの食文化
第10回	アメリカ編(1) New York Travel Immigration Students will also learn how to fill out forms for immigration and present passports. Each student will also be assigned to write one page for a travel guide for New York.
第11回	アメリカ編(2) Manhattan Tour 1 Students will join a PowerPoint tour of the ten most famous sites on Manhattan Island.
第12回	アメリカ編(3) Manhattan Tour 2 Students will continue the tour, studying New York songs, movies, and sports.

第13回	韓国編(1) 知られざるソウルの穴場
第14回	韓国編(2) 韓流ドラマのセリフ、こんな意味だった
第15回	韓国編(3) 5年ごとに変わる韓国社会
第16回	定期試験（筆記試験）

参考までに、5回ずつのリレー講義であった初年度（2008年度前期）のドイツ編のスケジュールも示しておく。

第1回	ドイツ編(1) ドイツ語の挨拶表現／ドイツ語を話す国々
第2回	ドイツ編(2) 自己紹介表現／日本語の中のドイツ語
第3回	ドイツ編(3) ホテルのチェックイン、アウト／ドイツにおける日本
第4回	ドイツ編(4) レストランでの注文／ドイツの食文化
第5回	ドイツ編(5) お土産の買い方／英語とドイツ語の比較（歌）

3.2. 講義の内容（ドイツ編）

2015年度前期現在、筆者が3コマ分を担当しているドイツ編の講義の流れは、以下の通りである。

- (Ⅰ) ドイツ語圏の映像を鑑賞し、その感想を書かせる
- (Ⅱ) ドイツ語・ドイツ語圏に関するクイズを行う
- (Ⅲ) ドイツ語入門として、簡単な表現を学ばせる
- (Ⅳ) クイズとドイツ語入門の感想を書かせる

ドイツ語圏の映像は、テレビ番組（NHK『テレビでドイツ語』の文化コーナー、フジテレビ系列『にじいろジーン』の「ジーンちゃんがキキコミ！世界ピカイチ☆ツアー」というコーナー、テレビ朝日系列『旅サラダ』の「海外の旅」というコーナー等）の録画や市販のDVD（ドイツ語圏の名所、お買い物スポット、食文化、クリスマスマーケット等がテーマのもの）を使用している。

クイズは PowerPoint を用いて、毎回 5 問実施している。以下にその例を示す。

クイズ例 1

ドイツ語はどっち？

- ① ä ö ü ß ② é è ê œ

クイズ例 2

「こんにちは」をドイツ語で言うと…？

- ① Guten Morgen! ② Guten Tag! ③ Guten Abend! ④ Gute Nacht!

クイズ例 3

ドイツ語を公用語としている国は、ドイツ、オーストリア、スイス、ベルギー、リヒテンシュタイン、ルクセンブルクの中でいくつあるか？

クイズ例 4

ドイツの人口は日本よりも多い。○か×か？

クイズ例 5

日本の消費税は 8 % であるが、ドイツの消費税（付加価値税）は？

- ① 10% ② 13% ③ 16% ④ 19%

クイズ例 6

ドイツが接している国の数はいくつあるか？

クイズ例 7

ドイツでは、12月26日は祝日である。○か×か？

クイズの正解

1 ①

2 ②

3 ドイツ、オーストリア、リヒテンシュタインはドイツ語のみ、ルクセンブルクはフランス語とドイツ語の 2 言語、ベルギーはオランダ語、フラ

ンス語、ドイツ語の3言語、スイスはドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の4言語が公用語である。従って、正解は6つ。

4 ×

5 ④（食料品等の軽減税率有）

また、ドイツにおける日本文化に関しては、漫画やアニメを扱っている。例えば、「ドラゴンボール」「セーラームーン」の単行本の日本語版とドイツ語版の比較やDVDアニメの鑑賞（ドイツ語吹き替えバージョンとドイツ語字幕付きバージョンの上映）を行っている。

2016年度には、ドイツ人漫画家の Carolin Eckhardt（カロリン・エックハルト）著『奥様 Guten Tag!』（集英社、第1巻2013年刊行、第2巻2014年刊行）を扱うことを予定している。因みに、この漫画は、「大学生と読売新聞が作る Campus Scope（Autumn 2015 vol.36）」のインタビュー記事で紹介されている。

そして、ドイツ語入門として学ぶ表現は、以下の通りである。

挨拶表現

Guten Morgen! / Guten Tag! / Guten Abend! / Auf Wiedersehen!

自己紹介表現

Wie heißen Sie? – Ich heiße _____.

Woher kommen Sie? – Ich komme aus _____.

Wo wohnen Sie? – Ich wohne in _____.

数詞

0～29をしっかりと練習し、30～100を概観する。

レストランでの注文に関しては、担当者の顔を覚えることが大切であること、水（Mineralwasser）は注文するものであること等を説明し、語彙や表現

としては、Speisekarte（メニュー）、Menü（定食）、Ich möchte zahlen!（お勘定をお願いします。）等を教えている。

参考資料：配布プリントを3種類

ドイツ語で挨拶

- (1) おはようございます。

グー テン モル ゲン

Guten Morgen!

- (2) こんにちは。

グー テン ターク

Guten Tag!

- (3) こんにちは。

グー テン アー ベント

Guten Abend!

- (4) さようなら。

アウフ ヴィー ダー ゼー エン

Auf Wiedersehen!

ドイツ語で自己紹介

- (1) あなたのお名前は？

ヴィー ハイ セン ズィー

Wie heißen Sie?

私の名前は _____ です。

イヒ ハイ セ

Ich heiße _____.

- (2) 出身はどこですか？

ヴォー ヘア コ メン ズィー

Woher kommen Sie?

私は _____ 出身です。

イヒ コ メ アウス

Ich komme aus _____.

- (3) どこに住んでいますか？

ヴォー ヴォー ネン ズィー

Wo wohnen Sie?

私は _____ に住んでいます。

イヒ ヴォー ネ イン

Ich wohne in _____.

ドイツ語の数詞 0～20

ヌル	null	0			
アインス	eins	1			空欄を埋めてみよう！
ツヴァイ	zwei	2			↓↓↓↓↓↓↓↓
ドライ	drei	3	ドライ	ツェーン	dreizehn 13
フィーア	vier	4	フィル	ツェーン	_____ 14
フュンフ	fünf	5	フュンフ	ツェーン	_____ 15
ゼクス	sechs	6	ゼヒ	ツェーン	sechzehn 16
ズィー	ben	sieben	ズィーブ	ツェーン	siebzehn 17
アハト	acht	8	アハ	ツェーン	_____ 18
ノイン	neun	9	ノイン	ツェーン	_____ 19
ツェーン	zehn	10	ツヴァン	ツィヒ	zwanzig 20
エルフ	elf	11			
ツヴェルフ	zwölf	12			

ドイツ語の数詞 21～29／30, 40, 50, 60, 70, 80, 90, 100

アイン	ウント	ツヴァン	ツィヒ	ein <u>und</u> zwanzig	21
ツヴァイ	ツヴァン	ウント	ツィヒ	zwei <u>und</u> zwanzig	22
ドライ	ウント	ツヴァン	ツィヒ	_____	23
フィーア	ウント	ツヴァン	ツィヒ	_____	24
フュンフ	ウント	ツヴァン	ツィヒ	fünf <u>und</u> zwanzig	25
ゼクス	ウント	ツヴァン	ツィヒ	sechs <u>und</u> zwanzig	26
ズィー	ベン	ウント	ツヴァン	sieben <u>und</u> zwanzig	27
アハト	ウント	ツヴァン	ツィヒ	_____	28
ノイン	ウント	ツヴァン	ツィヒ	_____	29

ドライ	スイヒ	drei <u>ß</u> ig	30	ズィーブ	ツィヒ	siebz <u>ig</u>	70
-----	-----	------------------	----	------	-----	-----------------	----

フィル	ツィヒ	_____	40	アハ	ツィヒ	achtzig	80
フュンフ	ツィヒ	_____	50	ノイン	ツィヒ	neunzig	90
ゼヒ	ツィヒ	sechzig	60	フン	デルト	hundert	100

4. 「ワールド・ツアー」をはじめた経緯

「ワールド・ツアー」は、(2005年10月に発足した) 大阪学院大学ランゲージセンター運営委員会の提唱である。なお、筆者は発足当時から現在まで、ドイツ語教員として運営委員を務めている。

4.1. 大学設置基準の大綱化と大阪学院大学の外国語教育改革

さて、日本の多くの大学では、1991年の文部科学省による「大学設置基準の大綱化」の影響で、外国語科目の卒業要件単位数が少なくなっている。

外国語科目に関する大綱化の内容は、「各大学・短期大学に開設を義務づけていた授業科目の科目区分（一般教育科目、専門教育科目、外国語科目及び保健体育科目）を廃止する」「学生の卒業要件として定められていた各科目区分ごとの最低修得単位数（大学の場合、一般教育科目36単位以上、専門教育科目76単位以上、外国語科目8単位以上、保健体育科目4単位以上）を廃止し、総単位数（大学の場合、124単位以上）のみ規定するにとどめる」である。

大綱化の流れを受け、大阪学院大学では2004年度に「現行の履修規程を改正し、“学部横断的な横型履修形態”、“専攻する所属学部の学問を深く学ぶ縦型履修形態”のいずれの履修をも可能とする規定に改める」という改革の方向性が示され、共通科目「言語と文化」の履修規程の1言語（外国語学部と国際学部は2言語）のみの制限枠を撤廃し、2005年度入学生からは、学生が希望する外国語の複数履修および修得単位を卒業単位数に充当できる履修規程に改正することにした。

その結果、筆者の所属する外国語学部英語学科では、共通科目「言語と文

化」の卒業要件単位が、2004年度入学生までは14単位（例えば、英語10単位＋フランス語4単位、ドイツ語10単位＋英語4単位、中国語10単位＋スペイン語4単位のように、英語、ドイツ語、フランス語、中国語から2言語を選択必修）だったものが、2005年度入学生以降は英語以外の1言語4単位に減っている。（2015年度現在、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語から1言語4単位が必修である。）

外国語を主体的にしっかりと学びたい学生にとっては、良い制度であると言えるが、実際には1言語4単位（〇〇語入門Ⅰ＋〇〇語入門Ⅱ）のみで卒業していくケースが多く、中級以上のクラスの履修者が少ないのが現状である。

4.2. 「ワールド・ツアー」の開講

英語以外の外国語教育の活性化として、入門クラスの履修者を増やしていくための方策として考えられたのが「ワールド・ツアー」である。すなわち、多様な言語に触れることにより、少しでも関心を持ってもらい、英語以外の外国語の履修者を増やしていこうという教育的な試みである。

ランゲージセンター運営委員会では、2006年度に議論を始め、2007年度に「言語文化入門」（仮称）として企画が具体化し、数回の意見交換を経て、「ワールド・ツアー」を「総合科目」として新設する方向が定まった。最終的には、英語教員、ドイツ語教員、フランス語教員が、共同で英独仏の3言語で前・後期に1コマずつ開講することを提案し、新入生向けのパンフレットを作成する等、教務部及びランゲージセンターの支援により企画・運営することができている。

本講義の開設の目的は、英語以外の言語の履修者を増やすためである。教育的な見地では、多言語・多文化（複言語・複文化）を体験することにより、幅広い視野、教養を身に付けることができると考えたからである。

5. 問題点と成果

5.1. 担当者について

科目の性質上、担当者は専任教員が望ましいが、中国語と韓国語は、殆ど非常勤講師に頼っている。例えば、2015年度前期は、ドイツ語とフランス語のみが専任教員で、英語、中国語、韓国語は非常勤教員である。また、2015年度後期は、英語、ドイツ語、フランス語が専任教員で、中国語と韓国語は非常勤講師である。

5.2. 受講者数について

2008年度は前期158名、後期469名、2009年度は前期42名、後期264名とばらつきが大き過ぎたので、評価基準の見直し、クラス増を経て、1～2年次限定の科目とした。

その結果、2010年度は前期67名、後期156名、187名、2011年度は前期64名、後期169名、159名、2012年度は前期92名、後期153名、141名、2013年度は前期112名、後期164名、170名、2014年度は前期131名、後期105名、96名、2015年度は前期80名、後期70名、67名と安定した人数となっている。

「ワールド・ツアー」受講者数の推移（2008～2015年度）

	年度	前期	後期	
仏 独 英	2008	158	469	
	2009	42	264	
仏 独 英 中	2010	67	156	187
	2011	64	169	159
仏独英中韓	2012	92	153	141
	2013	112	164	170
	2014	131	105	96
	2015	80	70	67

5.3. 評価基準について

評価基準は、2008年度がレポート30%、日常点70%、2009～2010年度がレポート30%、日常点20%、定期試験50%、2011年度以降は日常点50%、定期試験50%である。

履修者数が多いので、日常点に関わる小テスト、レポートの確認作業が煩雑である。

定期試験は、初めは論述形式で採点が大変だったが、現在はマークシート方式（4択）で採点に関する負担は低くなっている。

6. 今後の展望

大阪学院大学では、共通科目「言語と文化」の分野に、「英語」「ドイツ語」「フランス語」「スペイン語」「中国語」「韓国語」「日本語（留学生用）」が開設されている。そこで、将来的には、「ワールド・ツアー」に「スペイン語」を加えるべきと提案をしている。

また、現在は前期1クラス、後期2クラスの合計3クラスのみの開講だが、履修希望者が増える、適任の担当者が見つかる等の条件が整えば、将来的にクラス数を増やしたいと考えている。

今後も、自己点検（PDCA）を繰り返し、大阪学院大学の「ワールド・ツアー」を発展させていきたいと考えている。

7. 終わりに

日本における外国語教育の積年の課題解決をめざし、2012年12月3日に「一般社団法人日本外国語教育推進機構 Japan Council on the Teaching of Foreign Languages (JACTFL)」が設立されたが、筆者はその発起人であり、理事も務めている。

JACTFLの2015年シンポジウムは3月8日に上智大学で開催されたが、午後の分科会で「多言語活動の事例紹介資料」が配布された。筆者も「ワール

ド・ツアー」の事例を提供したので、その資料を最後に示すことにより、本稿を終えたいと思う。

なお、JACTFL 及び上記シンポジウムに関しては、以下の URL にアクセスされたい。

JACTFL ホームページ：<http://www.jactfl.or.jp/>

2015年3月8日 JACTFL シンポジウム：「多言語活動の事例紹介資料」

学校名／団体名	大阪学院大学
所在地・URL など	大阪府吹田市岸部南2-36-1 http://www.osaka-gu.ac.jp/
対象としている言語 ○をつけてください	○中国語 ○韓国語 ○フランス語 ○ドイツ語 スペイン語 ロシア語 その他（具体的に：○英語）
対象としている学年等	1～2年次
活動の内容や特徴	・ 全学共通科目の「総合科目（ワールド・ツアーに出かけよう！）」では、<u>中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、英語の教員5名が、それぞれの言語と社会や文化を、3回ずつのリレー形式で講義している。</u> ・ 到達目標：1) それぞれの言語の特徴や社会的・文化的背景などを学び、国際社会を生き抜くための最低限必要な知識、幅広い視野を身に着けることを目標とする。 2) 各言語で簡単な挨拶ができるようになると同時に、<u>英語以外の言語の知られざる「魅力」も学び、次学期以降における各言語の履修につなげる。</u> ・ 評価基準：定期試験50%（各言語10%ずつ）、日常点50% ・ 教科書：プリントを配布する。 ・ 2006年度に議論を始め、2007年度に企画し、2008年度に仏独英の3言語で開始する。2010年度に中、2012年度に韓が加わり、現在に至る。（2015年度も中韓仏独英の5言語）

活動をはじめた経緯	・ランゲージセンター運営委員会の提唱である。フランス語教員、英語のネイティブスピーカー教員、ドイツ語教員が共同で提案し、教務部の支援により企画することができた。 ・活動の目的は、英語以外の言語の履修者を増やすためである。 ・教育的には、多言語・多文化を体験することにより、幅広い視野、教養を身に付けることができると考えたからである。
活動を実施していく上での問題点・成果	・担当者は専任教員が望ましいが、中国語と韓国語は殆ど非常勤講師に頼っている。 ・受講者数の推移：08～09年度は158、469／42、264とばらつきが大き過ぎたので、クラスを増やし、1～2年次に限定の科目とした。その結果、10～14年度は67、156、187／64、169、159／92、153、141／112、164、170／131、105、96と安定した人数となっている。 ・日常点に関わるレポート等の確認作業が煩雑である。 ・定期試験は、初めは論述形式で採点が大変だったが、現在はマークシート方式で採点に関する負担は低くなっている。
今後の展望	・第2外国語として開講されている「スペイン語」を加えたい。 ・現在は前期1クラス、後期2クラスの合計3クラスのみだが、将来的にはクラス数を増やしたい。

(文責：神谷善弘／大阪学院大学外国語学部：ykamiya@ogu.ac.jp)

付 記

本稿を執筆するにあたり、教務課およびランゲージセンターの事務職員の方々から、「ワールド・ツアー」に関する会議資料の提供と本稿に掲載した資料の作成に関する助言をいただいたので、ここに感謝の辞を述べさせていただきます。

また、「ワールド・ツアー」の提唱者であるお二人、フランス語の伊佐先生

と英語のケリー先生にも大いなる感謝の気持ちを伝えさせていただきたい。

さらに、「ワールド・ツアー」を担当している先生方、「ワールド・ツアー」を受講してきた3,000人強の学生の皆さんにも、以下の言葉を伝えたいと思う。

Danke schön

Merci

Thank you

謝謝

감사합니다

海岸ツィムシアン語の等位接続詞 *ada* について

笹 間 史 子

1. はじめに

海岸ツィムシアン語は、カナダ北西部を中心に話される北米先住民諸語の一つである。海岸ツィムシアン語の等位接続詞 *ada* は、一般に（語ではなく）節あるいは文をつなぐ接続詞とされ、'and' と訳されてきた（Stebbins 1999, Anderson and Ignace 2008, Sm'algyax Living Legacy Talking Dictionary など）。しかし、*ada* が使われている例をみると、これが節や文のみならず、語・句をつなぐのにも用いられ、また、（必ずしも 'and' に相当しない）さまざまな関係の要素をつないでいることが分かる。本稿は、現地調査¹ で得た資料をもとに、*ada* の用法と機能について記述することを目的とする。以下、2 節で語をつなぐ用法を、3 節で句をつなぐ用法を、4 節で節をつなぐ用法を、5 節で文をつなぐ用法を見る。

2. 語をつなぐ *ada*

Stebbins (1999) や Anderson and Ignace (2008) にもあるとおり、*ada* は一般に節や文の接続をおこなう要素であり、名詞の接続は別の要素によってなされる。2 つの名詞の接続には、*dił*（固有名詞の前では *dis*）が用いられる。しかし、Sasama (2001) が指摘するように、3 つ以上の名詞をつなぐときには *ada* が使われる。最後の名詞の前に *ada*（固有名詞の前では *adat*）を置き、A, B *ada* C（または A *dił* B *ada* C）のように表す。(1)は *dił* を、(2)は *dis* を、(3)は *ada* を、(4)は *adat* を使った名詞接続の例である。（以下、海岸ツィムシア

ン語の表記は正書法にもとづく。)

- (1) 'Wiigyetk=Ø da noo-t **dil** nigwaa-t.
lonesome=3 PREP mother-3 and father-3
'She is lonesome for her mother and father.'
- (2) Nibiip-s Kayla=t Rick **dis** Lawrence.
uncle-POS Kayla=CN Rick and Lawrence
'Rick and Lawrence are Kayla's uncles.'
- (3) Yagwa=n didaalg=a noo-yu nigwaad-u **ada** łmkdii-yu
PRES=1SG talk=CN mother-1SG father-1SG and brother-1SG
'I'm talking to my mom, dad and brother'
- (4) Wilaay-u=t Kayla Kerri Tiffany **adat** Dayna.
know-1SG=CN Kayla Kerri Tiffany and Dayna
'I know Kayla, Kerri, Tiffany, and Dayna.'

ただし、2つの名詞を **ada** でつなぐことが不可能なわけではない。一般的な用法とはいえないものの、**dis** と **adat** を入れ替えられることが確認できた例も得られている。

- (5) a. Dm=t sila-waa-n dip=Kayla **dis** Tiffany.
b. Dm=t sila-waa-n dip=Kayla **adat** Tiffany.
FUT=3 with-be-2SG PL=Kayla and Tiffany
'Kayla and Tiffany will be with you.'

複数の形容詞が名詞を修飾する場合、これらをつなぐのに **ada** は用いられない。連体的に使われる形容詞は、接続詞をはさまずに並置される。

- (6) Gūül-t-u heeld-m sisuus-m maay.
 collect-TR-1SG many-ATT small(PL)-ATT berry
 'I picked lots of small berries.'

副詞は **ada** でつなぐことが可能である。

- (7) Na=ndip ga-x-hoo-'nm=t gyits'iip **ada** gyik=gyaatk.
 past=1PL PL-eat-fish-1PL=CN yesterday and again=last.night
 'We ate fish yesterday and last night again.'

動詞は項の表示を伴うため、動詞の接続は語レベルでなく、節レベルの接続となる。

- (8) Na=n huk-galksa-k'os-'nu **ada** gyiloo-yu.
 past=1SG always-through-jump-1SG and stop-1SG
 'I used to skip (with a skipping rope) but I quit.'

3. 句をつなぐ **ada**

名詞が数詞、形容詞、所有者名詞などにより修飾されると、それらの接続には **dił / dis** ではなく **ada** が用いられる。

- (9) Ksnsool klgüü-s Belle, k'ool hana'ax **ada** txalpxdool 'yuut.
 five children-POS Belle one girl and four boy
 'Belle has five children: one girl and four boys.'
- (10) Dzam dzawas **ada** dzam ts'imuu-m-baa'lax.
 jam salalberry and jam ear-COMP-ghost (>apricot)
 'Salalberry jam and apricot jam.'

- (11) ... ada=t gyik='woo nts'i'its Edna **ada** aam sgabuu gyet.
 and=3 also=invite grandmother+POS Edna and good many people
 '... and he invited also Edna's grandmother and a few other people.'

4. 節をつなぐ **ada**

ada の用法の中心となるのは節・文の接続である。**ada** により表される節関係はきわめて多様であり、これをいくつかに分類することはきわめて困難である。**ada** がどのような関係を表すかは、共起する語 (wil 'then', ts'uu 'although' などが含まれているか、含まれていなければ加えることが可能か) や話者により提示された英訳から推察するほかないが、主なものには、継起 (時間的前後)、因果 (原因と結果)、対比、逆接などがある。以下では、**ada** が表すこれらの接続関係を見ていく。なお、節・文をつなぐ **ada** は、**da** という短縮形であらわれることがある。

継起

ada は時間的に前後して起こるできごとをつなぐ。

- (12) Ayu-ts'u'utsg=it Fumiko **ada** ts'ilm-mag-at da ts'm-oven.
 work.on-chicken=CN Fumiko and into-put-3 PREP in-oven
 'Fumiko stuffed a turkey and put it in the oven.'
- (13) Sa'ayt-gat-goo'yiks=a dip=Raymond dis George **ada** wila=t Rick.
 together-RDP-come=CN PL=Raymond and George and then=CN Rick
 'Raymond and George came in together and then Rick.'

因果

ada は原因と結果を結ぶのに用いられる。

- (14) Ła wila ga-k'ot=a ga-'an'on-u **ada** lguksn dm t'amiis-u.
 IMP still RDP-run(PL)=CN PL-hand-1SG and unable FUT write-1SG
 'My hands are shaking and I couldn't write.'
- (15) Si-siipg-a'nu laam **ada** ap luk'wil haaxg-u.
 make-sick-1SG liquor and EMP really suffer-1SG
 'The liquor made me sick and I really suffered.'
- (16) Sa-gal'o-d-u t'u'utsgama'aks **ada** sabał-t.
 suddenly-drop-TR-1SG jar and spread-3
 'I suddenly dropped a jar and it split open.'

対比

日本語をはじめ、対比はしばしば逆接を表す要素によって表される（例えば渡辺（1995）の「対比的逆接」を参照）。海岸ツィムシアン語では、逆接を表す従属接続詞 *ts'uu*² があるものの、*ts'uu* は対比を表さず、対比はもっぱら *ada* によって表される。*aka* 'not' や *ayn* 'no' とともに、肯定・否定の対比で用いられることが多い。

- (17) T'aa-'nu=t Tiffany **ada** al aka di=t t'aa=s Melissa.
 slap-1SG=CN Tiffany and EMP not CNTRST=3 slap=CN Melissa
 'Tiffany slapped me and she didn't slap Melissa.'
- (18) Siipg=a t'mgaws-u **ada** (al) ayn=a ban-u.
 sore=CN head-1SG and (EMP) no=CN belly-1SG
 'My head is sore but not my belly.'
- (19) Lucy siilgit da galts'ap **ada** n-ts'imaay-t=a ts'iwaangit.
 Lucy oldest PREP village and POS-barnicle-3=CN youngest
 'Lucy is the eldest in the village and her "barnicle" (= great great grand-daughter) is the youngest.'

逆接

ada はときに従属接続詞 *ts'uu* 'although' とともに用いられ、逆接を表す。(従属接続詞とともに用いられた例は(28), (29)を参照。)

- (20) Na k'amts'n-yi-Txeen=t Millie **ada** aka=t wilaay-d=it Papa.
past secretly-go.to-Rupert=CN Millie and not=3 know-3=CN Papa
'Millie went to Rupert secretly but Papa didn't know.'

- (21) Hasag-u dm moxg-u da ferry **ada** libayt-haw good-u.
want-1SG FUT get.on-1SG PREP ferry and wrong-say heart-1SG
'I wanted to go on the ferry but I'm undecided.'

- (22) Sgüü na=n dm guks=a beans **ada** k'wit-k'waatg-it.
must past=1SG FUT soak=CN beans and RDP-disappear-3
'I was supposed to soak beans but they got lost.'

逆接関係を表す **ada** は、実際に起きたできごとをつなぐことも少なくないが、最初の節が「～を望んだ」、「～と思った」、「～すべきだった」といった(過去の)感情、願望、推測、義務などを、2番目の節が予測通りにならなかった事実を述べることも多い。「こう思ったが違った」、「これこれをすべきだったが生なかった」のように、2番目の節に否定を含む例が多く観察されている。

Malchukov (2004) はロシアの伝統的な言語学で「予測の否定」、「相反する評価」、「限定」の3つの逆接が区別されてきたと述べている。このうちの「限定」は、「彼は走り出したが、転んだ」のように、最初の節で述べたできごとが開始され、問題なく実現するだろうという予測をたてながら、2番目の節でそれを覆すものである。海岸ツィムシアン語ではいずれのタイプの逆接も **ada** により表されるが、このうちの限定はとりわけ(従属接続詞の *ts'uu* でなく) **ada** を用いた接続で表される。

ada は、しばしば強調を表す **al** や **ap** とともに用いられる。**al**, **ap** は、逆接

および対比の **ada** と共に使われることが多く³ (例 (23), (24) ; 上記 (17), (18) も参照)、Sm'algyax Living Legacy Talking Dictionary は **ada al** を逆接の接続詞としている。しかしながら、**al** や **ap** は強調をあらわし、逆接表現における必須の要素ではない。逆接以外の用法でも **al** や **ap** があらわれうるし (例 (25))、また、逆接用法・対比用法が必ずしも **al** や **ap** を含むわけでもない。

- (23) Yagwa x-ts'imaatg-m-'anaay-u **ada al** ayn=as Mildred.
 PRES eat-sweet-COMP-bread-1SG and EMP no=CN Mildred
 'I'm eating cakes but not Mildred.'
- (24) Gani wila xsan=s Lucy **ada ap** aka xstaa-t.
 continuously still gamble=CN Lucy and EMP not win-3
 'Lucy goes to bingo but doesn't win.'
- (25) Si-siipg-a'nu laam **ada ap** luk'wil haaxg-u.
 make-sick-1SG liquor and EMP really suffer-1SG
 'The liquor made me sick and I really suffered.' = (15)

Stebbins (1999) は、**ada** をはじめとする節を導く接続詞について、後続の節が最初の節と同じ時制・アスペクトをもつことをこれらの接続詞が示しているとする。しかしながら、次の例に見るように、接続詞によりつながれた節は、異なる時制・アスペクトマーカ― (二重下線にて表示) をとることが可能であり、必ずしも同じ時制・アスペクトをもつわけではない。

- (26) Na sgüü anaay da k'oy **ada** la gawdi-t.
 past lie bread PREP me and IMP all.gone-3
 'I had bread but it's all gone.'

二つの節の時制・アスペクトが同じ場合は、それぞれに同じ時制・アスペクト

マーカー（二重下線にて表示）が置かれる。

- (27) la dm=t kwdaxs-id=a dip=gwa'a Txałgiw **ada**
 near.future=3 leave-3=CN PL=this Hartley.Bay and
la dm=t silm=yil-yeltg-it da wil 'wit-'waatg-it.
 near.future=3 back=RDP-return-3 PREP where RDP-come.from-3
 'They are leaving Hartley Bay and they are returning where they came from.'

上にあげた **ada** の主な用法のうち、対比においては、二つの節が同じ時制・アスペクトマーカーをもつのが一般的である。一方、逆接や因果では、時制・アスペクトが異なることも少なくない。最初の節に過去（完了）を表すマーカーの **na** が、二つめの節にゼロ（非未来）または **la**（未完了）がしばしばあらわれる。

従属節と主節をつなぐ **ada**

最後に、従属節と主節をつなぐ **ada** についても触れておく必要がある。逆接を表す従属接続詞 **ts'uu** 'although' や時をあらわす従属接続詞 **la** 'when' を含む文において、しばしば従属節と主節の間に **ada** が置かれる。ただし、この **ada** は必須の要素ではなく、従属節と主節をただ並置することも可能である。

- (28) ... ts'uu si'ił phonetg-u das Sarah da Git'amaat **ada** aka lu-wan-t.
 although try phone-1SG PREP Sarah PREP Kitimat and not in-sit-3
 '... even though I tried to phone Sarah in Kitimat, she was not home.'

- (29) Ts'uu=t dii 'woo-'nm **ada** ayn=sn=l dm di
 although=3 also invite-1PL and no=maybe=IRR FUT CNTRST
k'a-daawl-m
 PL-go-1PL
 'Even though we are [also] invited, but [maybe] we are not going.'
- (30) Ła galksa-luyeltg-it **da** sis'aaxs[-t]
 when through-return-3 and laugh[-3]
 'When she came back through, she was laughing.'

(28)～(30)でみたように、*ada* は主節に先行する従属節のあとに置かれるのが一般的である。しかし、主節が先行し、後続の従属節との間に *ada* が置かれる例も見られる。

- (31) Goo=l gan=t wil laagwa-t **ada** ts'uu[=t] wilaay
 what=IRR why=3 that do-3 and although[=3] know
 goo gan waal-t?
 what why happen-3
 'Why do they do it while they know why it happened?'

5. 文をつなぐ *ada*

ada は文中のみならず、文頭にも置かれ、民話をはじめとする語りにはとりわけ頻繁にあらわれる。20世紀前半に Beynon が収集したテキスト (Beynon 1929-39) においても、筆者が現地調査で得たテキストにおいても、*ada* で始まる文はきわめて多い。次の例のように、いくつもの文が次々と *ada* でつながっているのをしばしば目にする。

- (32) Ap luk'wil siipk. **Da**[=n] wila k'amts'n-huutg=a nurse.
 EMP very sore And[=1SG] then secretly-call=CN nurse
 'It (=my chest) was very sore. And I secretly called the nurse.'
Da wila hasax-d=a n=m 'yaga-yaa-t.
 and then want-3=CN past=FUT down-walk-3
 'And she wanted to come down.'
Ada aka haw-yi awil dm lip bax-yaa-yu.
 and not say-1SG because FUT oneself up-walk-1SG
 'And I said no, I will walk up myself.'
Da wila k'a=t k'yilam ksinaatg=a da k'oy.
 and then for.a.while=3 give breath=CN PREP me
 'And then she gave me some oxygen.'
Ada=t gyik=gaa la baa na-good-u ...
 and=3 again=take how go POS-heart-1SG
 'And she took my heartbeat [again] ...'

しかしながら、海岸ツィムシアン語の文末は「上昇>大きめの下降」というイントネーションにより特徴づけられるものの、節が **ada** でつながっている場合、そこに文の境界があるか否かを判断することは必ずしも容易でない。そのため、「節をつなぐ **ada**」と「文をつなぐ **ada**」の別の判断がつきにくいケースもある。⁴

文をつなぐ場合、時間的に前後して起こるできごとを並べたり、ある対象についての情報を追加したりするのに使われることが多い。とはいえ、文をつなぐ **ada** の範囲は広く、それまで述べてきた内容と関連のない話題へと転換する際にも **ada** が使われる。

- (33) (2 日前に起きた飛行機事故の話をしていて)

Ada ła dm gyik=gani=waal waasg=a gwa'a ...
and near.future again=continuously=do rain=CN this
'And this rain is going to continue on again ...'

- (34) (数日前に亡くなった叔父と、その妻である叔母の話をしていて)

Ada goo=ł ła waal laxa gwa'a asda Wednesday!
and what=IRR how do weather this at Wednesday
Gadziksg=a waas.
pour.down=CN rain
'And what happened to the weather on Wednesday! It was pouring.'

- (35) (文句の多い夫がしばらく留守にするので耳が休まる、と話していて)

Ada asi gaks 10 o'clock da ganlaak ada aka di
and still only 10 o'clock PREP morning and not CNTRST
ga-malsgmt'u'utsg=a lukda'in-tg-u.
PL-phone=CN grandchild-PL-1SG
'And it's only 10 o'clock in the morning and my grandchildren haven't
phoned yet.'

思い出話など、時間的・空間的に隔たったできごとから、より身近なできごとに話題を転換するときに多いようである。

さらに、語りにおいては、一つの話題についての話が一段落して次の話題をさがすときに、*ada* を観察することがある。"aadaaaa..." のように母音を長めに発音して、次の言葉までの時間を埋めているのである。海岸ツィムシアン語では、「えーと」のようなフィラー専用の形式は観察されない。文と文の間にかがられるが、等位接続詞 *ada* がその役割を担っていると言えるかもしれない。

6. まとめ

以上、等位接続詞 **ada** の用法と機能を概観し、**ada** が節・文のみならず、さまざまな語や句をつなぐのにも用いられること、節をつなぐ場合には継起、因果、対比、逆接等、さまざまな関係をあらわすこと、あらわす関係により時制・アスペクトに偏りがあること、従属節と主節をつなぐのにも用いられること、文頭にあっては異なる話題に転換したり、時間を埋めたりするのにも使われることを見た。

注

- 1 海岸ツィムシアン語の現地調査はカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州ハートレイ・ベイおよびプリンス・ルパートにおいておこなった。調査に協力してくださった話者の方々に感謝したい。本研究は、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(C)）「カナダ北西海岸地域諸言語の形態統語法に関する記述的研究」（課題番号：25370470、代表：堀博文）の助成を受けている。
- 2 短母音を含む **ts'u** を用いる話者もいる。
- 3 ただし、Malchukov (2004) の「限定」においては、あまり **al** や **ap** が用いられないようである。
- 4 本稿で用いた資料の収集に際しては、録音を提示して、問題の位置で文が終わるか否かの最終的な判断を話者から得ている。

略号一覧

- affix boundary	= clitic boundary	1/2/3 1st/2nd/3rd person
ATT attributive	CN connective	CNTRST contrast
COMP compound	EMP emphatic	FUT future
IMP imperfective	IRR irrealis	PL plural
POS possessive	PREP preposition	PRES present
RDP reduplication	SG singular	TR transitive

参考文献

- 渡辺学 (1995) 「ケド類とノニ ―逆接の接続助詞―」 宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の方法 (下) 複文・連文編』 557-564. くろしお出版.
- Anderson, Margaret Seguin and Marianne Ignace (2008) *Visible Grammar: Ts'msyen Sm'algyax Grammar Resources—Twenty User-Friendly Modules on Key Sm'algyax Structures*. School District 52, Prince Rupert.
- Beynon, William (1932-39) "Tsimshian Texts." ms. Special Collections, Columbia University Archives, New York.
- Malchukov, Andrej L. (2004) "Towards a Semantic Typology of Adversative and Contrast Marking." *Journal of Semantics* 21/2, 177-198.
- Sasama, Fumiko (2001) "A Descriptive Study of the Coast Tsimshian Morphology." Lit.D. dissertation. Kyoto University.
- Sm'algyax Living Legacy Talking Dictionary. <http://web.unbc.ca/~smalgyax/>
- Stebbins, Tonya (1999) "Issues in Sm'algyax (Coast Tsimshian) Lexicography." Ph.D. dissertation. The University of Melbourne.

On the Coordinating Conjunction *ada* in Coast Tsimshian

Fumiko Sasama

Coast Tsimshian has a coordinating conjunction *ada* that has a very general meaning. This paper describes the usages and functions of *ada* and shows that (i) it connects words, phrases, clauses, and sentences, (ii) when connecting clauses, it has various implications including sequential, resultative, contrastive, and concessive implications, (iii) these implications are somewhat conditioned by the tense/aspect of the clause, and (iv) when connecting sentences, it may start a new topic or just fill in the time until the next utterance.

大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語学、外国文学を専攻し担当する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
1. 会 長 1名
 2. 副 会 長 1名
 3. 庶務・編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。
副会長は会長が会員の中から委嘱する。
委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。

第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金その他の収入をもってあてる。

第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

附 則

1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

大阪学院大学外国語論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格
 - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
 - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究ノート、翻訳、書評など。
4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。

ワードプロセッサ使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

外国語文の場合はA4判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者によるチェックを受けることが望ましい。
5. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
6. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用を決定する。
7. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。

なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
8. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、平成25年4月1日から適用する。

以 上

大阪学院大学外国語論集執筆要領

1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
2. 欧文は1行あきにタイプすること。
3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。

インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)

7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
9. 執筆者校正は3校までとし朱筆のこと。3校以前で校了してもよい。
10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでとくに注意されたい。

ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組換料が生じたとき。

イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。

11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

以 上

執筆者紹介（掲載順）

山 口 修 経 済 学 部 准 教 授

神 谷 善 弘 外 国 語 学 部 准 教 授

笹 間 史 子 情 報 学 部 准 教 授

編 集 後 記

第69号をお届けいたします。本号には1篇の論説と2篇の研究ノートを掲載することができました。ご多用のなか力作をお寄せ下さった執筆者各位にお礼申し上げます。

本学会をより活性化させていくためには、論集の充実と同時に、多岐にわたる分野の会員が研究を発表し、互いに刺激し合うことが不可欠です。会員の交流によって外国語・外国文学に関する研究を深め、また投稿意欲を喚起していきたいと思えます。

「セメスター制導入」について、この編集後記に言及されているのが平成10年でした。また新たに「クォーター制」の導入が決定しています。それに伴う業務の増大、教育方法の転換を迫られる中、大学教員として重要な教育・研究・業務の3つをバランス良く務めることが求められています。この学内学会のメンバーが一致して、互いに励まし合って、個々の研究を高めていくことができるように願って止みません。

(K. N.)

大阪学院大学外国語学会役員

会 長 長岡みゆき

副 会 長 黒宮 公彦

編集・庶務委員 笹間史子・永岡規伊子・山口 修・吉村京子

大阪学院大学外国語論集 第69号

平成27年 6 月20日 印刷	編集発行所	大阪学院大学外国語学会
平成27年 6 月30日 発行	〒564-8511	大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号
	電話	(06) 6381-8434 (代)
	発行人	長岡みゆき
	印刷所	大枝印刷株式会社
		吹田市元町28番7号
		電話 (06) 6381-3395 (代)

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

No. 69

A Study of “Miriam” — Miriam’s Role As a “Shadow”
..... Osamu Yamaguchi 1

Research Notes

Praxis-Bericht des Deutschunterrichts in der Vorlesung „Sogokamoku (Machen wir eine Weltreise!)“ — Durch die sieben Jahre 2008-2014 bis achttes Jahr 2015
..... Yoshihiro Kamiya 19

On the Coordinating Conjunction *ada* in Coast Tsimshian
..... Fumiko Sasama 35

June 2015

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY